

写真投影法を用いた小石原焼の里の景観の把握と評価―窯元と来訪者との比較―

九州産業大学工学部 学生会員 ○馬場直也 石井克典 九州産業大学工学部 正会員 山下三平
金沢大学 丸谷耕太 龍谷大学 林珠乃 久留米工業大学 大森洋子

1. はじめに

1-1 背景

福岡県朝倉郡東峰村小石原皿山地区は民芸運動で注目を集めた小石原焼の里である。この窯業集落は昔ながらの製法を守りながらも近代化を受容し、生産性を上げるため機械を取り入れた。近年では人口の減少により後継者不足や観光客の減少が問題視されているため、窯元/家族は地域の活性化を狙い、小石原皿山地区を整備してきた。小石原焼は他の焼き物と異なり店頭販売の割合が高い¹⁾。来訪者にとって魅力ある里の景観を整備するには、地元の人々と来訪者との、意識の違いを把握する必要がある。

1-2 目的

そこで本研究は小石原皿山地区において、窯元/家族と来訪者の注目する景観を直接的に把握し評価を比較する。こうして地域改善のための基礎的な知見を得ることを研究の目的とする。

2. 研究方法

2-1 調査対象

対象地域は福岡県朝倉郡東峰村の小石原皿山地区である。この地区は小石原焼の産地として知られている場所で、かつては 20 基ほどの唐臼(原土を粉碎する装置)が並び、独特の景観を作り出していた。しかし民芸運動の影響で 1960 年代以降、観光客が増加し、生産性を上げるために唐臼の代わりにスタンプを導入し唐臼は徐々に姿を消した。機械化による生産性の向上の一方、次第に観光客が減少した。加えて窯元の後継者不足が問題になっている。

2-2 調査方法

本研究は調査に「写真投影法²⁾」を適用した。被験者にデジタルカメラを渡し、被験者に自由に景観の写真を撮ってもらい、その都度コメントしてもらう方法である。

窯元のデータは 2013 年 3 月 4 日から 3 月 11 日までに行われた小石原地区の住民 (30 名中 26 名) を対象とした 858 枚の写真と評価である³⁾。来訪者のデータは

2016 年 7 月 16 日に学生 40 名 (男 23 名・女 17 名) により 1278 枚の写真とコメントを得ている。

写真から主対象を窯元/家族で 38 種、来訪者で 54 種を決定し、その上で 8 種に包括し分類した(表 1)。この分類には 6 名の分析者が当り、協議の上で決定した。またコメントの精査を同様に行い、評価を「肯定」「評価なし」「肯定」に分類した。

3. 結果と考察

3-1 窯元／家族と来訪者の主対象の比較

表 1 主対象とその包括分類別の種類

		窯元/家族							
包括分類	移動・誘導	自然	作陶	共有の場所	居住	聖性	人間	その他	
主対象	道 (150)	花 (47)	焼き物 (31)	場所・皿山 (35)	家屋 (60)		人間 (4)		
	サイン (101)	木 (36)	唐臼 (28)	伝統産業会館 (15)	ごみ (9)	茶室 (1)			
	装飾 (25)	川 (26)	作業機軸 (25)	温泉 (14)					
		林 (26)	養子窯 (16)	小石原工芸館 (14)					
		動物 (20)	えんどう (13)	ギャラリー小石原 (11)					
		山 (13)	庭 (9)	広場 (9)					
		空 (7)	長石 (2)	休憩所 (8)					
		草 (5)	粘土 (1)	遺跡 (3)					
		池 (4)	ガス窯 (1)	皿山公民館 (2)					
		沼 (3)		道の駅 (1)					
		煙 (1)							
主対象数 計	3 (276)	11 (188)	9 (126)	10 (112)	2 (69)	2 (83)	1 (4)		0

		来訪者							
包括分類	移動・誘導	自然	作陶	共有の場所	居住	聖性	人間	その他	
主対象	装飾 (110)	川 (81)	焼き物 (176)	場所・皿山 (32)	家屋 (273)	宗教設備 (43)	人間 (7)	屋敷 (3)	
	サイン (107)	花 (32)	養子窯 (38)	公衆トイレ (16)	ベント (16)			イタシ屋 (1)	
	道 (101)	木 (29)	新 (23)	小石原工芸館 (12)	座 (10)			観 (1)	
	施設 (11)	草 (25)	唐臼 (19)	伝統産業会館 (10)	ポスト (7)				
	バス停 (2)	林 (22)	えんどう (10)	消防設備 (9)	いりや (3)				
	カーブスラー (2)	土 (3)	庭土 (8)	温泉 (4)	倉庫 (3)				
	ガードレール (1)	空 (3)	ガス窯 (3)	広場 (2)	野道 (2)				
		山 (2)	ガスボンベ (1)	バス停 (2)	ビールの箱 (2)				
		煙 (2)		生活改善センター (2)	車 (1)				
		昆虫 (1)			ごみ (1)				
		魚 (1)			標 (1)				
					電気ポット (1)				
					有刺鉄線 (1)				
					調理室 (1)				
主対象数 計	7 (334)	11 (201)	8 (278)	9 (88)	14 (322)	1 (43)	1 (7)	3 (5)	

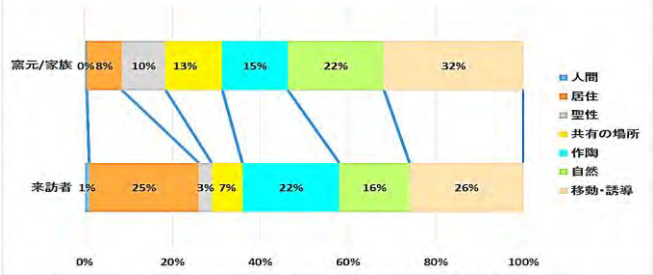


図 1 全体の包括分類別の写真の割合

表 1 は主対象とその包括分類の根源であり、図 1 は主対象の包括分類を窯元／家族と来訪者で比較したものである。両者とも「移動・誘導」が最も多い。一方、来訪者は「居住」が次に多く、特徴的である (25%)。また「人間」の撮影が窯元/家族より 7%多く「自然」が 8%少ない点も目立った相違である。来訪者が焼き物の里をより強く意識していることが分かる。

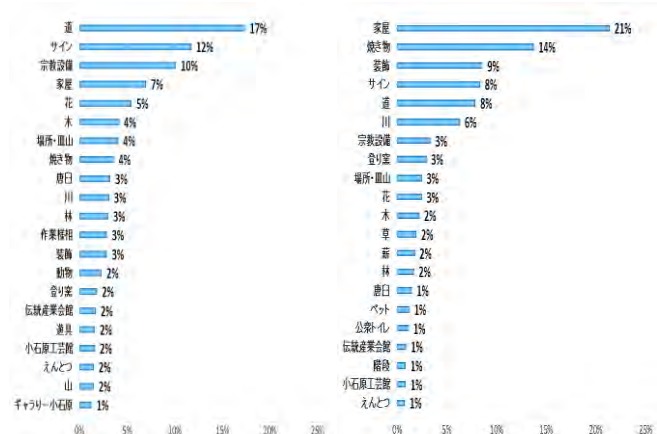


図2 窯元/家族の主対象の割合 図3 来訪者の主対象の割合

図2と図3は主な(10件以上)主対象の頻度を示したものである。窯元/家族は「道(17%)」が主対象として最も多く、次に「サイン(12%)」である。移動や誘導に関心が高いことが分かる。

一方、来訪者は「家屋(21%)」が最も多く、次に「焼き物(14%)」が多い。このように窯元/家族は道やサインなど移動・誘導に関心があり、来訪者は居住や作陶に関心があることが分かる。

3-2 窯元/家族と来訪者の評価の比較

図4と図5は包括分類別の評価の図である。評価に10%以上の顕著な違いが見られるものは、「共有の場所」「自然」および「作陶」である。「共有の場所」を比較すると、窯元/家族は肯定の意見が50%あるのに対して来訪者は37%であり包括分類別の評価では一番差が大きい。「自然」は窯元/家族の肯定が43%で来訪者が58%である。「作陶」は、窯元/家族は「肯定」が38%に対して来訪者は56%である。また前者は、「評価なし」が55%でもある。

このように、拠点、自然および生業の景観に地元と来訪者で大きな評価の違いがある。

図6と7は主な(10件以上)主対象の評価をまとめて図にしたものである。窯元/家族で「肯定」が6割以上の主対象は「えんとつ(85%)」「装飾(84%)」「場所・皿山(82%)」「花(68%)」「唐臼(64%)」および「ギャラリー・小石原(64%)」である。一方、来訪者は「花(81%)」「川(79%)」および「焼き物(65%)」である。皿山の好ましい景観要素と地元で認識されている「えんとつ」や「唐臼」は、必ずしも来訪者にアピールしていないことが分かる。一方、「花」は両者に好ましくとらえられており、地元の美化が一定の成果を上げていることが分かる。

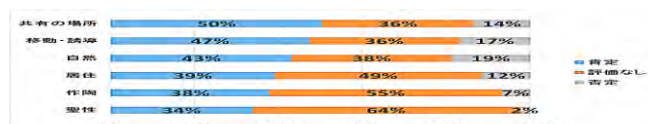


図4 窯元/家族の包括分類別の評価

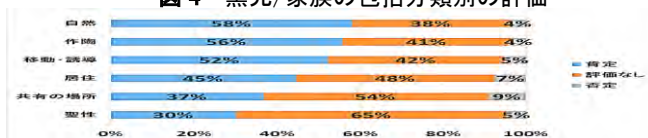


図5 来訪者の包括分類別の評価

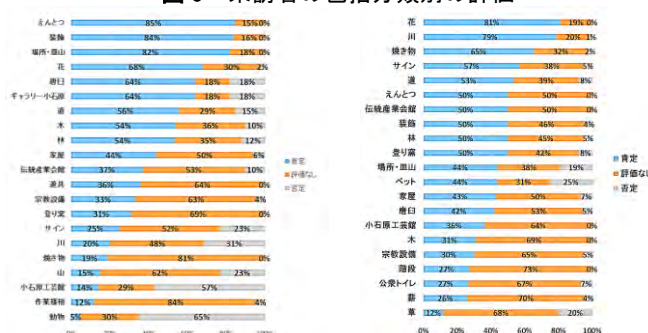


図6 窯元/家族の主対象の評価 図7 来訪者の主対象の評価

4. まとめ

本研究では写真投影法を用いて、小石原皿山地区の窯元/家族と訪問者の注目している景観の把握と評価を比較した。得られた成果は以下になる。

- 1) 窯元/家族は移動・誘導に、来訪者は地元の居住の仕方や作陶に関心がある。
- 2) 作陶に関して窯元/家族は意識的でないが、来訪者は注目している。
- 3) 窯元/家族は皿山の好ましい景観要素である唐臼や煙突の評価が高いが、来訪者は必ずしもそうではない。

来訪者へのアピールを考えれば、今後、作陶と居住についての景観要素としての洗練が重要となろう。窯元/家族が移動・誘導という手段に注目していることを踏まえ、それを含めて総合的に改善を図ることが望まれる。

謝辞: 本研究は日本学術振興会科学研究費助成事業(基礎研究C)として「小石原焼と小鹿田焼の里における文化的景観表象の分析と評価(代表者:山下三平)」の研究として行われたものである。

＜参考文献＞

- 1) 濱田英里: 北部九州における窯業の現状とそれに基づく景色の意義, 九州産業大学都市基盤デザイン工学科卒業論文, 2014.
- 2) 野田正彰: 表白される子供たち, 情報センター出版局, 1998.
- 3) 山下三平・丸谷耕太・内山忠・栗田融: 写真投影法による陶芸の里の表象分析と評価, 景観・デザイン研究講演集 No. 10, pp139~146, 2014.